

店主の独りごと

(第5回)

前日本科学技術ジャーナリスト会議会長・元読売新聞編集委員

小出重幸



玉原国际セミナーハウス

群馬県沼田市、標高1200メートルの玉原高原に、東京大学玉原国際セミナーハウスがあります。ブナの森の一角、ここで毎年6月、数学者と市民らが集う「ジャーナリスト・イン・レジデンス(JIR)」というワークショップが開かれます。

ジャーナリスト、政治学者、法律家、漫画家ら、毎回30人近くが4日間、合宿生活する

に30分ずつフレクチャーし、質疑、討論を重ねます。一緒に食事をし、湿原や森をハイキングするプログラムがあり、風呂に入り、夕食後もラウンジでグラスを片手にさらに語らう——要

催しで、数学者と市民が交互に入つてみたら、どんな体験ができるか?」という、最先端研究に基づくエキサイトティングな講義もあります。

日本数学会が、JIR事業を始めたのは、2010年。「科

ルに入つてみたら、どんな体験ができるか?」という、最先端研

究に基づくエキサイトティングな講義もあります。



音楽と数学を語る中島さち子さん

由に見て、お茶を飲みながらインタビューする、という取材支援プロジェクトを立ち上げたのです。

数学の話は私も得意ではありません。ある一線から先、「ブツツーン」と分からなくなる難問に取り組む……というイメージは、あつさり粉碎されました。多くの数学者は物

理もスマートで、人当たりも良く、さらに驚いたのは発想の柔軟性、社会を見る目の自由度でした。

玉原合宿でも、魅力的な若い男女の研究者と巡り合いました。彼らの著作には、わたしたちに読みやすい好著も多く、サイエンス読書カフェの今後のテーマに加えたいと考えています。

数学者の柔軟な発想

諦は、自由に討論すること、ブ

レインストーミング』を通してコミュニケーションを深めることころにあります。

学者の説明責任」という言葉

がはやり始めたとき、「世の中最も実態を知られていない」と自覚する数学者らは、そのトレンドに鋭く反応しました。京

学コミュニケーション」とか、「科学者の説明責任」という言葉

の目で、社会を見

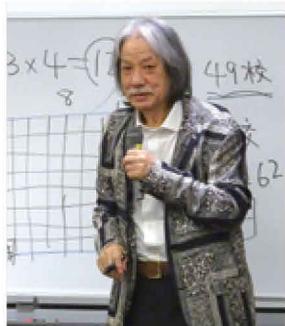
い男女の研究者と巡り合いました。彼らの著作には、わたしたちに読みやすい好著も多く、サイエンス読書カフェの今後のテーマに加えたいと考えています。

大学の藤原耕二教授、東京

理科大学特任副学長に登場い

けていた写真家が、作品を見せながらレクチャーし、文章論を教えるジャーナリストが、「人に伝わる表現」について語り、数学者が「音楽と数学の関係」、あるいは、「ブラックホ

ード」に鋭く反応しました。京都大学の藤原耕二教授、東京大学の坪井俊教授らが全国の大学、研究機関に呼びかけて、JIRに研究室に滞在してもらい、数学者の日常を自



秋山仁さんを招いたサイエンス読書カフェ

卒業研究大学院大学(GRIPS)客員研究員。昭和薬科大学講師。よみうり大手町スクールで「サイエンス読書カフェ」の店主をつとめている。



小出重幸(こいでゆき) 1951年東京生まれ。科学ジャーナリスト。

ただ、硬軟自在の幾何学のパフォーマンスを披露していただきたいことがあります。常に根柢に戻って、課題に向き合う

本に戻って、課題に向き合う

という数学のプロセスが、自由な精神を導いているのかもしれません